中舞鶴の歴史・くらし探検隊
活動ニュース

第4号
発行　平成27年9月15日
編集　中央公民館
舞鶴市字余部下1167

第3回探検
和田地区を行く

「中舞鶴の歴史・くらし探検隊」（２７年度中央公民館事業）の第３回〝探検〟として、８月１６日、和田地区を探索しました。太平洋戦争開戦の翌年、昭和17年には、村の西半分・長江地区一帯が軍施設拡張のため買収され、村が激変。その前後の様子が描かれ絵図を見せていただきながら、当時の人々の暮らしに思いを巡らせました。概要を報告します。

▲中国・長江の名をもつ長江寺。軍施設拡大のため、昭和17年に現在地に移転

五老岳の北麓、波静かな入江

昭和17年、村の半分が海軍に接収、激変

長江寺を訪ねる

長江（ちょうこう）寺は、慈覚大師・円仁の開祖。中国で海中に投じた自刻の観音像を和田の浜で再発見したと伝える。軍施設拡張で現在の地に移転を余儀なくされた。

本尊の十一面千手観音菩薩立像（写真左）。入口の石柱には普明國師と慈覚大師の名が刻まれる（下の写真２点）

▲和田地区の鳥瞰図や長江寺の絵図を見せていただきました（和田集会所＝8月16日）

戦前･戦後の様子を絵図に
故・瀬野勇さんの記録

地元で生まれ育った故・瀬野勇さん（1926～2012）が描いた和田地区に関する絵図が残されています。二女の康子さんから特別に見せていただきました。探検隊の活動結果を発表する機会に、一緒に展示できることを希望しています。

（3ページに関連記事）

長江地区の眺め

五老岳の北麓に位置する長江（ながえ）地区。海の眺めは中国・長江の大河を偲ばせるらしい。戦前は軍施設、今は水産加工センターや老人保健施設、工場などが立ち並ぶ。

府道から見た長江地区（写真上）。最近まで、白杉地区から船に乗って田んぼづくりに来られていたそうだ。ここからの海の眺めは絶好のビューポイントに（写真右）

▲下安久の海岸は、小説「舞鶴心中」（大正4年　近松秋江）の舞台。道路脇の石垣は別荘群の跡。海軍士官が私邸として建てたようだ。

舞鶴国際埠頭の周辺

▲埠頭の案内板。建設時は（仮称）和田埠頭となっていた。

“竜宮城”の夢の跡（乙礁付近）

藤の森、海水浴場

生い茂る藤、ひっそりとたたずむ祠。昔は海水浴でにぎわったそうだ。ゲートボール場もある。

木々が激しく絡み合い荒々しさを感じさせる藤の森（写真上・右）

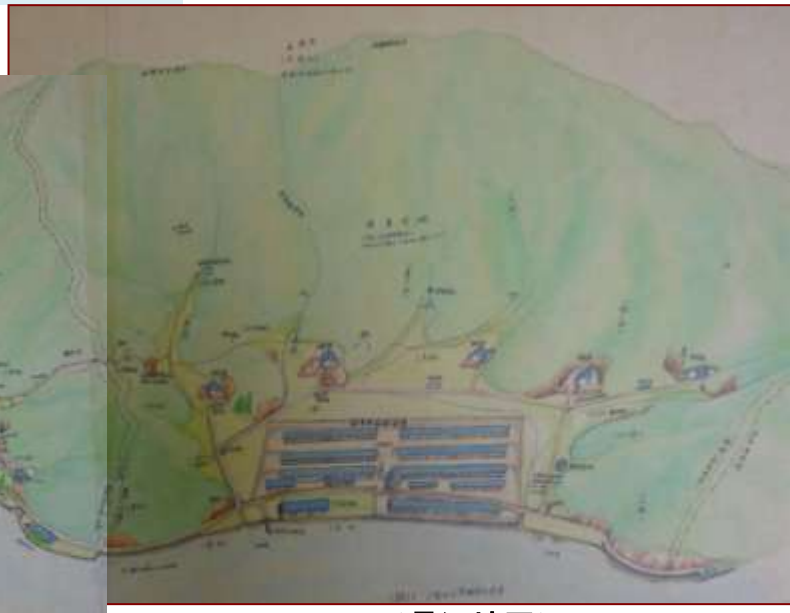
かつては海水浴場

▲大樹の根元にある祠

当時の様子を伝える絵図

故・瀬野勇氏　描く

＜和田地区＞



＜長江地区＞

「1945年（昭和二十年）の和田村の記録」（1989年1月復元製図）（部分）　瀬野勇氏による大戦中の和田地区の鳥瞰図。記憶を呼び起こしながらまとめられたものだが細部まで緻密に書き込まれている。

「思出」（旧長江寺全景図）」（部分）（昭和57年復元下書き、平成8年3月製画）
慈覚大師の開基で往時は七堂伽藍を配していたという。桜が描かれているが、雲門寺の開祖・普明國師が参詣された折、突き立てた桜の杖から育ったという伝承にちなむ枝垂桜「濡鷺の桜」（ぬれさきのさくら）か？

白浜台に新名所

10年前から、紅しだれ桜公園を整備。海望台も完成

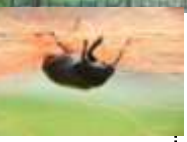
和田中学校裏の斜面に紅枝垂桜を育て、紅しだれ桜コンサートなど、イベントの企画も仕掛けられている黒岩氏

絶景！　〝紅しだれ桜公園〟に続く山を整備し海望台に。丸太を切り割って作ったベンチやテーブル。みんなで記念撮影。春はﾐﾂﾊﾞﾂﾂｼﾞが美しいとのこと

和田中の向かい（南西側）を歩く

和田中学校の向いの畑に立つ煉瓦造りの門柱跡（左）。下の写真は土台部分。先の大戦中は徴用工員宿舎があった。

農道沿いに防空壕



和田地区にも田んぼがある（上）。田を覆うネットにカブトムシ…（左）

五老岳から発する大杉川。この奥には隠し田があったという。

第3回探検の感想

▽有意義な探検だった。

▽ふれあいサンデーで報告・展示する予定だが、舞台発表だけでなく、食事場所となっている研修室の壁を使って展示する方法もある。

▽ふれあいサンデーでの展示自体が目的ではない。仲間を増やすきっかけにしたい。

▽前回の座学で紹介された、梅垣喜太郎さん作成の図面、緒書を展示したい（→ご子息に頼む）

▽瀬野勇さんが描かれた昭和初期の和田村や長江寺の絵も一緒に展示したい。

▽明智光秀稲荷社（余部上）を守っている人がいる。詳細を尋ねてまとめてみたい。

▽和田中学校前には煉瓦の構造物が残っている。

▽元の長江寺にあったとされる「濡鷺の桜」は、地元白浜台の活性化の取り組み「枝垂桜」につながる物語だ。

▽瀬野俊作コレクション展が実業会館で開催中。見に行ってほしい。

▽昔の地図を見るとかつら峠にはトンネル「葛隧道」（幅3間）があったことが分かる。今はトンネルはないが、地図との比較も面白い。

▽展示のテーマは「知られざるあまるべ（余部海部）の里～移転・栄える・伝える」はどうだろう。

【お断りとお願い】

掲載内容については、今後の探検活動の中で、追記・修正等を行う予定。後日、活動成果を取りまとめた展示を中央公民館で開催する計画です。掲載内容に関連する情報提供をお願いします。

中舞鶴の地名を考える

餘部の古代　その③～

前回、餘部は「海部の民」という意味である、という私見を述べた。＜あまるべ＞という地名は全国に95か所ある。身近な所では但馬の余部鉄橋のある餘部、亀岡市の国道9号線沿いにある餘部などがある。これ程数多くある＜あまるべ＞という地名を残した『海部知男命』とは、いったい何者なのか？本当に「東表国」（とうびょうこく）などという国が日本にあったのか？これこそが日本の古代史の最大のヒミツなのである。このヒミツを知りたい人は、中国の遼の王族の耶律羽之（やりつ・うし）が編纂した「倭人興亡史」を是非とも読んでいただきたい。貴君貴女の歴史観がコペルニクス的大転換をすること太鼓判を押すしだいです。

◆東表国

トウビョウとは蛇を意味し、紀元前7，8百年頃オリエントから航海してきた人達が国東半島に打ち立てた国である。彼等を派遣したのはイスラエル王国のソロモン王である。人種構成はユダヤ人を筆頭にヒッタイト人、エジプト人、エベス人（フェニキア人）を主体とする航海団であった。彼等の目的は主に鉄であったが、国東半島の重藤（しげふじ）に莫大な量の鉄鉱石の断層を発見したのである。この証拠となる製鉄遺跡は九州大学工学部の坂田武彦教授の並々ならぬ努力の末発見された。そこには数万トンの鉄の残滓が残っていたのである。この鉄は中国の殷に運んで交易された。そしてこの後東表国の都として、ヒッタイト王国の首都ハットウサの名前をそのまま借用した。こののち漢字が日本に入ってきて、八幡宇佐と漢字変換され，後に宇佐八幡と呼ばれることになった訳である。

3000年前頃の古代の話である。そう簡単には解説できない。

宮津籠神社、海部家の先祖の海部知男命の詳細については次回のお楽しみとさせていただく。

（井本精一）